

第八回 日本野外教育学会大会 シンポジウム

テーマ「野外教育による地域貢献－野外教育の今後のあり方を問う－」

◇パネリスト : 上山 静一 (イオン株式会社)¹⁾
佐川 哲也 (金沢大学)²⁾
山田 俊行 (NPO法人白川郷自然共生フォーラム)³⁾

◇コーディネーター: 時安 和行 (中京女子大学)⁴⁾

1. シンポジウムの目的

それでは日本野外教育学会第八回大会のシンポジウム、テーマ「野外教育による地域貢献－野外教育の今後のあり方を問う－」を始めさせて頂きたいと思います。「野外教育による地域貢献」ということですが、地域貢献と言っても幅が広いと思います。やはり地域貢献のために、何かやればよい、何をしても構わないということではなく、自然と共存するような活動でなければならないでしょう。また、教育という立場で考えますと、やはり人を育てなければいけないのではないかと。

さらに細かく考えますと、地域住民の学習活動や自然体験活動を支援するものでなけれ

ばいけないと思います。さらに、地域の自然環境の改善、まちづくりを支援し地域の発展と活力のアップへの貢献ということが野外教育関係者に求められていることではないでしょうか。

また、野外教育に携わる団体の発展や個人の成長のため、あるいは社会的財産や成果の共有というのも合わせて考えるべき視点かなと考えております。その際、重要なのは自分達の活動がどうだったのか?ということ、目的に沿ったきちんとした評価が行なわれなければならないですし、やりっぱなしあるいは自己満足での活動に終わらないための地域貢献はどうあるべきなのか、ということを考えながら進めていきたいと思っております。

1) イオン株式会社
〒261-8515 千葉県千葉市美浜区中瀬1-5-1
2) 金沢大学
〒920-1192 金沢市角間町
3) NPO法人白川郷自然共生フォーラム
〒501-5620 岐阜県大野郡白川村馬狩223
4) 中京女子大学
〒474-8651 愛知県大府市横根町名高山55

1) AEON Co., Ltd
1-5-1 Nakase, Mihama, Chiba (261-8515)
2) Kanazawa University
Kakuma-machi, Kanazawa (920-1192)
3) NPO Shirakawago Shizen Kyosei Forum
223 Magari, Shirakawa, Ono (501-5620)
4) Chukyo Women's University
55 Nadakayama, Yokone, Obu (474-8651)

2. シンポジストの紹介

今回のシンポジウムでは、野外教育という手段を使って行う企業での地域貢献、大学、つまり高等教育機関での地域貢献、NPO・自然学校での地域貢献について3名のシンポジストから報告いただきます。最初に企業での地域貢献ということで事例報告いただきますイオン株式会社環境・社会貢献部長でいらっしゃいます上山静一様です。次に、大学での

地域貢献ということで事例報告いただきます金沢大学教育学部助教授、金沢大学角間の里山自然学校事務局長でいらっしゃいます佐川哲也先生です。最後にNPO・自然学校での地域貢献という視点で事例報告いただきますNPO法人白川郷自然共生フォーラム理事、トヨタ白川郷自然学校チーフインタープリターでいらっしゃいます山田俊行様の3名の方々です。

お客様とともに行う環境保全・地域貢献活動

上山静一

(イオン株式会社 環境・社会貢献部)

1. コーポレートシチズンシップ(企業市民)の意義

イオン株式会社が行っている環境保全活動、地域貢献活動、コーポレートシチズンシップという切り口における活動の結論は2つあります。1つは、いかにその本業のビジネスプロセスの中に体内化をしていくかということです。本業というのは商品の開発であり、店舗の開発、あるいは商品の配送等であります。

二つ目の大きなポイントは、ステークホルダー(利害関係者)の方々といかに連携をするかです。単にコミュニケーションというレベルではなくて、具体的な責任と相互の義務というものを明確にした形のリレーションを構築していくということ、すなわちステークホルダーとしてのお客様であり、株主であり、取引先であり、テナントの方々であり、あるいは地域社会、従業員とのコラボレーションということをいかに創造していくか、この二

点が結論であります。

本日は後者のほうに力点をおいて事例を報告させていただきます。これから非常にシンボリックな事例を三つ紹介することにより、私どもの活動のひとつのイメージを描いていただけるのではないかと思います。

2. イオンこどもエコクラブ (現在はイオンチアーズクラブ)

「イオンこどもエコクラブ」という活動を、すでに十年来続けています。これは環境省の提唱する事業ですが、全国で3,500名を越える小学生を中心とする子ども達と一年間、店舗を拠点として環境教育を実践しています。エコクッキング、田んぼの生き物調査、あるいはネイチャーゲーム等のいろいろなプログラムがありますが、その中のエコクッキングの事例を紹介します。

エコクッキングは、店舗で働いているいわ

ゆるパートタイマーを中心とした500名弱のサポーターのうち、農産物を担当している方が旬という意味を子ども達に伝えたいという思いで実施しました。旬というのは新鮮でおいしいという価値もありますが、もっと多面的な意味を持っていることを、エコクッキングを通じて子ども達に伝えたかったわけであり、たとえば旬の食材はトマトで、トマトは旬の時は当然露地で栽培されます。トマト1キロを露地で栽培すると、1,100キロカロリーのエネルギーがかかります。旬をはずすと当然のごとくハウス栽培になりますので、ハウス栽培では同じトマトを1キロ作るとすると、10倍を超える11,900キロカロリーのエネルギーがかかります。これは決してトマトだけの話ではなく、ナスもキュウリもだいたい5倍から7倍の使用エネルギーがかかるわけですので、野菜の旬ということは非常に多面的な意味を持っているということ、子ども達にエコクッキングを通じて伝えた事例です。

子ども達は非常に素直ですから、学校教育の中でそれを壁新聞などで仲間に伝えます。しかし、そのことに最も影響を受けたというか反応が強かったのは母親です。それほどの使用エネルギーが違うとは全く知らなかったということで、その後の買い物行動そのものを意識的に変えていきたいという報告が出ています。小売業はこのような小さなことを、繰り返し情報発信をしていくミッションを持っており、非常に重要なこととして推進をしております。

3. イオン・デーにおける「イオン幸せの黄色いレシートキャンペーン」

二つめの事例は、毎月11日を「イオン・デー」として行っている「幸せの黄色いレシートキャンペーン」です。蜂の巣状のボックスがレジのすぐ後ろに置いてありますが、このボックスにはその店が立地している地域で活

動しているNPO、ボランティア団体、市民団体の名前とどんな活動をしているかということ、を簡潔にまとめた名札が張ってあります。11日はレシートの色が黄色に変わり、お客様は精算後に自分が共鳴する活動を行っている団体のボックスに黄色いレシートを投函するという一種の投票行為がこの活動です。私はあなた方の活動を支持しますという無言の意思表示になります。

六ヶ月後に投函されたレシートの合計金額の1%について、ジャスコやマックスバリュの店長が予めその団体から聞いていた商品を寄贈するというシステムです。例えば点字を広げようという運動をしている団体には、点字そのものを作る穴を開ける道具を寄贈しました。この他に音楽で子ども達の病気を治すという団体、子ども達のスポーツ促進、自殺防止の110番など、いわゆる宗教と政治以外の地域活動をしている9,384団体が去年1年間登録し、お客様からレシートの投函を受けています。

さらに今この活動が進化し始めています。単にその商品の寄贈を受けるというレベルからある特定の地域では、例えば生ゴミの地域循環を具体的に店舗、地方自治体、NPOが実際に運動を始めて、地域循環を創り始めてきています。また、先ほど申し上げた音楽で子ども達の病気を治すという活動は、団体がインターネットで活動を報告したところ、同じ主旨の活動をこれからしようという方々がインターネット上で呼応をしていき、ひとつの地域の活動が大きな広がりを持って進化し始めているということがあります。

レシートの投函には団体によってバラつきが大変出ますが、レシートが少ししか集まらない団体からすると、自分達の活動が地域の人達にあまり知られていないのだと強く反省をして、買い物に来られた方々に自分達の活動をプレゼンテーションする場所を貸してほしいというリクエストが来ます。店舗にはセ

ントラルコートを中心としたフリースペースがありますので、リクエストが来ればその団体に場所をお貸しして、自分達の活動をプレゼンテーションするところに第2回目のふれあいが発生し、インターネットでさらに進化していきます。

4. 産学官民・共同プロジェクト

三つ目の事例が「産学官民・共同プロジェクト」です。小売業というのは基本的に地域産業でありますから、地域固有のいろんな特徴をビジネスに反映させます。結果的に地域に還元するというのを非常に意図している産業です。「産学官民・共同プロジェクト」は、京都市での事例で、京都大学という大学、京都市という行政、環境市民というNPO、そして私どものジャスコ東山二条店という大変小さなお店、それから店に実際に買い物に来られる一般のお客様、この五つのセクターが集まっているいろんなテーマの実証実験を以前から実施し続けています。

このひとつの事例に「地産地消」ということがあります。「地産地消」というのは、その土地でとれたものをその土地で消費をするという、最も環境負荷の低いライフスタイルと言われています。しかし、なかなか広がりませんでした。その最大の理由は、人出がかりすぎることと、数が多く集まらずコストが高くなることでした。このプロジェクトでは実際にハウレンソウを素材に、この五つのセクターが集まってビジネスとして成り立つかというモデルを作りました。京都市の北部でとれたハウレンソウ、その横に他府県産のハウレンソウ、その横に外国産のハウレンソウと大きくこの三つのハウレンソウを東山二条店の農産売場に置き、京都市北部のハウレンソウには地産地消という環境の価値をPOP広告等でお客様に伝えるということをやりました。京都産は価格が当然高くなるわ

けですが、通常の相場が一束138円の時に10円高い148円でしたが6割の方が地産地消の京都産のハウレンソウをお買いになったという結果になりました。

普通お客様というの是一円でも安い方を当然買うわけですが、環境という情報、その意義を伝えたところ、今申し上げたような結果が出ました。そこで京都市と環境市民というNPOという第三者の立場からこれを推奨することをもう一回やるとさらに数字があがるということになります。これは非常に重要な情報でありまして、148円売価で6割の方が購入するとなれば、それが可能な原価構成をその地域のエコファーマーの人達と一緒に作れば、ビジネスとしてこれは十分成り立つということです。そのことを他府県に水平展開し、それからイオン本社の非常にローカルなマーチャンダイジングという商品開発の部署に情報提供して、さらにそれを精査するという形で進めています。地域貢献活動ということについては、イオンというその企業だけではなく、それぞれのセクターの強さを活かして、これを掛け算する方法で新しい成果が生まれるということだと思います。

5. イオンの環境理念とその具体的活動

私たちイオンは、「お客さまを原点に平和を追求し、人間を尊重し、地域社会に貢献する」というグループ理念のもと、企業市民としての社会的責任を果たすため、社会貢献活動と環境保全活動を積極的に推進していきます。

同時に私たちは、これらの活動が地域に根ざしたものであると認識し、地域の方々とのパートナーシップを育み、循環型社会の構築を目指します。

社会貢献活動というのは、寄付行為を行うという活動だけではなく、本業そのもののビジネスプロセスを変えて結果的に社会貢献をするということが大切です。例えば、ある自

自動車会社がハイブリッド車を開発し、今それが商品の中心になり、結果的に環境に優しい現象を生み出している。まさに本業の中にビジネスプロセスを変えて社会貢献していますが、この姿をイオンの中に作るという意味です。重要なのは地域とのパートナーシップ、それから未来を担う子どもへの環境教育という実践を通じて健やかな成長を支えるということです。これは子どもにとって良いことをやるという意味ではなくて、イオンを土俵にして子どもが自主的に何かを体感するという場面をかなり多く作っていきたいという環境方針の中核的なものです。

それから環境に配慮した商品の開発と、環境に配慮した店舗作り、いわゆるエコストアというものを新しく作りましたのでこの報告をします。エコストアは名古屋市千種に先月オープンしました。コンセプトは変革と技術革新、情報発信、学習と協働ということですが、今日報告したいのは学習と協働ということです。かなり意図的に子ども達に対して、自ら環境に関して気付く、あるいはそれを体感するということを組み入れています。具体的にハード面では、最も適した自然エネルギーを導入し、環境負荷の小さい、環境効率の高い建築資材をかなり使っています。ソフト面では、環境配慮型商品をよりお客様に供給するというレイアウト、プレゼンテーションを行っています。それから廃棄物の循環を地域のNPOと実際に作っているというアクション、それから情報開示ということでのどのような環境に関するパフォーマンスが具体的にあるのかという子どもにもわかるエコインフォメーションのシステムを店内に導入するなどしています。このように環境に関して今まで個別にやってきたことの集大成として全部取り入れたという店舗を作りました。

もう一つ報告したいのは、「イオンふるさと森づくり」ということで1991年から新しく店舗をオープンする時は、必ずその地域に

もともと自生している木をその地域にお住まいのお客様と一緒に植え続けるということをやっています。これまで54万人のお客様がここに参加をしていただいて、540万本くらいになっております。結果的に1,400トンくらいのCO₂の削減には寄与しているわけですが、いずれにしても緑いっぱいショッピングセンターを作りたいということで、かなり子ども達が参画しています。さらに毎年一回の育樹祭というメンテナンスを大変重要な活動として位置付けています。

6. イオンにおけるその他の環境活動

最後に報告したいのはイオン1%クラブという活動です。1989年に設立し、税前利益の1%を資金として環境保全と国際的な文化、人材の交流、地域の文化、社会の親交をテーマにいろんな活動をしているのですが、その1つの活動でカンボジアに屋根のある学校をプレゼントしようということをして3年間にわたって募金を呼び掛けてきました。カンボジアでは屋根のある五つの教室のある学校は400万円です。お客様に呼び掛けて3年間でおよそ70の学校を造ることができました。この活動にお客様や従業員から5000万円の募金があったとすると、追加5000万をこの1%クラブが拠出して合計1億で学校を造るという活動を続けています。そこには必ずエコクラブを中心とした日本の子ども達が開校式に参加をするということも続けています。どういふことを感じて子どもが日本に帰るかということは大変意味のあることと思っております。この子ども達が5年後、10年後に大人として成長していけば、環境に関する感受性が全く違う大人がそこに成長しているということが我々は横で見て感じるわけでありまして。非常に重要な活動と思って1%クラブは継続しています。

それからもうひとつは財団法人のイオン環

境財団というものを作って、発展途上国と日本の環境活動を行っております。この時も必ず中心となるのはボランティアの人達です。例えば万里の長城の植林活動を3年間にわたって行いました。単にお金だけを供出することではない活動を地道ですが続けています。財団法人として実施しているのは、企業の経営成績が変動をすれば、こういう活動も変動をするということがあってはならないと思っていますので、別途の公益法人にしたということです。

7. イオンの今後の課題

私たちとしては社会的に責任のある企業に変わりたいと思っています。しかし、まだ十

分にそれができてるとは思っていません。そういう意味で大変重要なのは、企業の経営資源を活用したイオン各店舗でのイオンデーのような地域の支援活動、それから社会的な商品やサービス、社会的事業の開発というショッピングセンターの開発のビジネスプロセスを変えるということです。さらに経営活動のプロセスに社会的公正性、倫理性、環境の配慮というのを組み入れて、誰がやっても同じアウトプットが出るということが本質的な企業における社会貢献活動だという風に思っています。その中のコアにあるのが、対子どもたちとの関係をどのように組み入れて実践をしていくか、そして成果を出すかということだと思っています。

金沢大学「角間の里山自然学校」が取り組む地域交流

佐川哲也

(金沢大学「角間の里山自然学校」)

1. 里山自然学校の目的

金沢大学は13年くらい前にキャンパスを山の方へ移転しました。キャンパスは200ヘクタールほどありますが、兼六園からの景観が悪くならないように、キャンパスの兼六園側を開発しないで里山が残されました。金沢大学はその里山を活用して角間の里山自然学校を立ち上げたというわけです。

設立主旨は三つあります。角間キャンパス内の里山を教育研究フィールドとして整備すること、その里山を市民交流の場として開放し生涯学習の機会を提供すること、そして、荒廃した里山をできる限り復元・保全し、ほ

とんどできていないとも思いますが、できるならば二十一世紀の里山モデルを作ろうということです。

2. 里山自然学校の歴史

角間の里山自然学校は平成11年にスタートしましたが、初年度は地元の方と竹林整備を少し実施しただけでした。これでは駄目だということで、次の年に季節ごとに何か活動しようとして年4回の活動を実施しました。これでも駄目だということで平成13年度は毎月行うことに決め、毎月その時々に必要な活動は何だろうと計画を立てながら実施しました。や

はり月1回でも全然駄目でした。次の年は、もう少し多くやろうということで、月2回の活動に増やしました。第二土曜日と第四土曜日を定期活動日と決めて、とにかくその日に何かするというので一年間やりました。やっぱり駄目でした。しかし、よく考えるとこれ以上やったら教員としての本務ができなくなるということで、これ以上増やさないとにしました。

平成13年だったと思います。里山自然学校の活動に参加している方を里山メイトと呼び、特に熱心に参加している方達に「自分達の会を作りませんか」と呼びかけて会員組織を作りました。そしてその人達と協力しながら活動を始めてきました。平成15年からは、里山メイトのアイデアを積極的に取り入れ、彼らの企画を採用しながら取り組みました。平成16年にはこれはなかなかいけそうということで、メイトの皆さんにいろいろな企画を出してもらい、それを里山自然学校と連携して月に二回の事業を行っています。今年度は、里山に合うような、とても大学らしくない建物ですけれども、古い民家を移築できました。こういう建物できたことを契機に「角間の里」という名前で呼んで、ここを拠点として活動をしています。

3. 里山自然学校のスタッフとネットワークづくり

スタッフは、代表が理学部の教授です。事務局長は私です。二人を中心として理学、教育、経済、薬学など様々な教員の支援をいただいて自然学校を運営しています。その他に非常勤で里山の研究員、今年から地域連携コーディネーターという方にフルタイムではないですが、二人来ていただいています。それから非常勤の事務員一名です。大学の正規の組織として自然学校が位置付いておりませんので、常勤の事務職員はおりません。それか

ら、これが課題と言えるかもしれませんが、学生の主体的な参加は現在のところあまりないという状況です。

里山を持つ大学とのネットワーク構築と交流ということで、去年から里山のある大学の京都女子大学、龍谷大学、それから移転を計画している九州大学この四つの大学とネットワークを組んでお互い交流しています。

4. 里山自然学校の事業

里山自然学校では、植物や昆虫、動物や野鳥、きのこなどいろいろな自然観察会を定期活動の中に入れていきます。特に動物というのは冬場、雪の上での足跡観察会です。里山保全活動では大学キャンパス内の竹林や雑木林を整備します。これ以外では、近くにある小学校の総合的な学習の時間などの学習支援、それから知的障害を持つ児童生徒の里山学習支援です。ここでは、養護学校の子どもたちが教室でない里山の中でどんな学習ができるのだろうかという取り組みを続けています。今年からは、学習障害を持つ生徒も参加して、彼らがどのように変化していくのだろうか、ということも連携して取り組んでいます。それから学生のための授業や学校教員のための里山学習研修会です。この教員の研修会は、理科あるいは生物部会の方達が参加して、一緒に山を歩きながらどういう風に使えようという意見交換や大学の研究を紹介し、それに一緒に取り組んでいくということが動き始めています。

それから里山ボランティアの研修プログラムもあります。これは地元のインタープリターの会のような方達と連携してのボランティア研修です。大学ですので里山観測拠点としての生態学的研究、市民を対象とした里山講座の開催にも取り組んでいます。石川県あるいは市町村と連携した里山フォーラムも開催しています。これはまだまだ動き始めたところ

ろで、まだどう展開していくかわかりませんが、行政と連携した中山間地対策支援にも取り組み始めました。

5. 角間の里山メイトによる企画プログラム

「角間の里山メイト」は自然学校の任意団体と位置付けられ、平成17年度の会員数160名で最近建物ができて少しずつ増えています。会費は年間2,000円です。里山メイトによる自主企画を採用しています。里山メイトには早く自然学校から独立していただき、パートナーシップの関係でやっていきたいと思っています。幹事会というのを作って動きだしています。いろいろ意見が出てきますが、肝心なところになると「先生お願いします」となり、独立していくには時間がかかると思っています。

平成16年度に里山メイトはこんな企画を実施しました。金沢市周辺では棚田のことを「ヤチダ」と言いますが、「ヤチダ」での米作りと餅つきです。それから竹林整備と竹炭づくりや竹馬作り、遊歩道整備と雑木林の下草刈り、里山料理体験ということで笹寿司、草餅、そして茸の栽培、椎茸やナメコを栽培しています。さらに地元小学校の総合的な学習の時間の支援です。これはメイトの方達がボランティアで子どもたちに植物の話をするなどの支援を行っています。あとは植物調査です。大学がやる植物調査にメイトの人達が参加して、かなりレベルが上がっています。また、「ちっちゃいものクラブ」という幼児と親が参加して親から子に伝えたい昔遊びや、首飾りづくりそれから竹スキーなどを実施しています。平成17年度には、雑木林の再生と遊歩道の刈り開け、北田の棚田復活、藍の栽培と藍染め、里山の植物草木染め、山野草の移植プロジェクト、目の不自由な子どもを里山へ招待したいとか、記念館の前に竹藪を切って梅林にするなどの活動を、メイト自身が

企画を立てて実施しています。

田んぼ作りでは、最初は箱苗をいただいたのですが農薬が使っているということで、次から自分達で直蒔きを始めました。「50年前の農業を復活しよう」と里山メイトは言っています。小学校の支援の一つとして、昔の千歯こぎを子どもたちに体験させています。それから自分達が育てたもち米で餅つきを行っています。また、わら草履作りをお年寄りに教えてもらうような活動をメイトが中心となって実施しています。

学生の授業の一環としては、地理学の実習で、掘ったタケノコを次の日市民が運営している朝市へ持っていき、売る体験をしています。それから自分達の焼いた竹炭を学園祭の時に販売しました。今年の春は山菜をみんなで食べようと山菜を採ってきたり、みんなで笹の葉を採ってきて笹寿司を作りました。工作的な活動としては、花の首飾り作り、ホオの木の葉っぱを使った風車作り、ドングリを使った工作などの活動があります。

6. 自然学校の成果と今後の課題

里山メイトの活動から里山自然学校の成果は何かと考えると、保全、多様性、楽しみ、恵み、文化、健康、研究の支援、自然体験、生きがい、感動、コミュニケーション、多世代、居心地、責任などのキーワードが導かれるでしょう。

里山と付き合ってみると、里山の時間、リズムというものが分かってきて、無理したら何にもならない、里山との付き合いは何年もかけて無理せず楽しむことが大事だ、ということが分かってきています。また、里山活動に関心を持つ市民は増えてきており、里山は家族や市民が交流する本来の親密さを取り戻す優れた空間だということも分かってきました。

里山は地域作り、まちづくりを活性化させます。また、大学生は非常にバーチャルで仮

想的だというようなことも分かってきています。自然学校という形で取り組んでいて、自然学校の学校観というものをこのように考えるようになりました。子どもというのは里山に感動する増幅装置で、大人ばかりでは面白くないのですが、子どもがいることで感動のポイントを教えてくれて、さらに非常に盛り上がってくれるので、子どもはなくてはならない構成要素だと考えています。

里山が「教えるー学ぶ」の関係ですが、これは双方向で決して先生から生徒へという縦から縦の関係ではない、そういう意味での学校ではない、個人の関心によって自由に配列できる「超学校」と書きましたけれども、そういうものであると思います。言い方を変えると非常に教科書的でないものと理解しています。経済的に価値を失って忘れられた空間となっていた里山が、自然、環境、共生、感動、直接体験など様々な価値を媒介する優れた現代メディアになっていると理解しています。

自然学校の課題ですけれども、大学は里山プログラムを提供するイベント業ではないので、教育、研究を通じた取り組みがきつと大

学らしい社会貢献になるだろうと考えています。大学はこれまで地域社会の期待にほとんど答えていなかったということを市民と付き合い合うようになって分かってきました。もっと市民の声に耳を傾け、パートナーシップを持って取り組むことが必要であり、そのためには学生を含めて学内の組織作りをもう少ししっかりしなくてはいけないと思っています。

さらに地域との交流で貢献とまで言えないですが、最初から地域貢献とか社会貢献と力んでも駄目です。市民と共に里山で交流することが、結果的として地域貢献と評価されているようだと理解しています。交流を通じて、市民が大学の地域貢献を支えてくれています。これはメイトの皆さんのことですが、大学が企画したプログラムに参加していただいて、それに熱心に取り組んでくれることが結果として大学の地域貢献を盛り上げてくれていると現時点では感じています。そして、大学の魅力を市民に探求してもらうこと、大学はこういうことが面白い、素晴らしい、もっとやらせてほしい、ということから大学の地域貢献ということが理解されると思っています。

自然学校と地域の関わりについて ートヨタ白川郷自然学校の立ち上げを通してー

山田俊行

(NPO白川郷自然共生フォーラム、トヨタ白川郷自然学校)

1. 白川郷自然共生フォーラムと自然学校の設立

岐阜県の白川郷にトヨタ自動車がつくりましたトヨタ白川郷自然学校の立ち上げを通して、NPO法人白川郷自然共生フォーラムがど

のように地域貢献、地域と関わっているのかということを紹介したいと思っています。白川郷自然共生フォーラムはトヨタ白川郷自然学校の運営の業務委託を受けるという形になっています。実は、トヨタが自然学校をつくるという話と私達がNPOを立ち上げる

という話が平行に進んでいました。そのあたりをまず時系列で簡単にご紹介いたします。始まりは、トヨタ自動車岐阜県の白川郷、白川村に土地を買収したことから始まります。これが約30年前です。172ヘクタール、一つの集落が集団離村した土地を買収したことが始まりです。ちなみにここは非常に雪の深い所で、白川郷と言うと雪の景色を思い浮べる方もいると思いますが、その白川郷の集落で2メートル積もる時、ここでは3メートルから4メートルも積もります。昭和56年の豪雪の時、ここでは8メートルの積雪があったと言われています。

そういう中で環境に対する意識の高まりということや、社団法人日本環境教育フォーラムが「自然学校宣言」を出したり、また、その日本環境教育フォーラムの理事とトヨタ自動車の環境担当者が出会ったりということがあって、トヨタ自動車の中に自然学校を作ろうという話が決まったと聞いています。これが2000年ぐらいのことと聞いています。このような経緯で日本環境教育フォーラムが自然学校をつくることをコーディネートしようということになりました。

2. 自然学校の目的と運営

トヨタ自動車で作ったトヨタ白川郷自然学校の設置の目的が三つあげられています。一つ目が、企業、NPO、地域と三者共同による自然体験型環境教育の実践の場を提供する、二つ目が、広く一般にも解放し自然と触れ合うきっかけを与え、癒しの場を提供することです。これはトヨタ自動車社内の表現なのですが、広く一般にもというのは、つまりトヨタの社員の保養所ではないということです。それから三つ目は、自然体験型環境教育活動を通じて、周辺の自然環境を改善、回復するということがあげられました。

それをもとに運営はどうしようかという時

にNPO設立の話が立ち上がってきました。そこで、基本的な運営については、すでに計画段階からアドバイザーはNPO、NGO関係者でしたので、そういう方々と共同で自然学校を運営していくことが求められているのではということで、新しいNPOに運営を委託しようということになりました。

基本的にはトヨタ白川郷自然学校というのはトヨタ自動車環境部の一事業になります。その一事業の運営をNPOに業務委託したということになります。白川郷自然共生フォーラムの設立が今年の10月8日になります。活動内容としては、トヨタ白川郷自然学校の業務運営、それから地域自然保全活動などということになります。役員の構成は大きく三つですが、トヨタ自動車と白川村役場村民、それからNPO関係者ということで、日本環境教育フォーラム、日本野鳥の会、世界自然保護基金、ボーイスカウト、ガールスカウトなどに所属している者です。日本中の環境NPOの方々と一緒に作り上げたNPOになっています。企業と行政関係者それからNPO関係者が入ったNPO法人というのは、全国的にも非常に稀だという風に言われております。つまり最初から、白川村の地元の方々、役場と一緒にこの自然学校をやっていこうじゃないかと、いうコンセプトになっております。

3. ブナの森復元プロジェクト

自然学校の事業をつめていく中で、NPOサイドからトヨタ自動車に提案したことがあります。トヨタ白川郷自然学校は、トヨタ自動車の一事業ですが、取り組むべき課題として、長期に渡る自然貢献活動をプロジェクトという形で折り込んだらどうでしょうかということ提案しました。これについて承認いただき自然学校の方では様々なプロジェクトを展開しております。

どのようなプロジェクトを作ったのかとい

うと、一つ目は、ブナの森復元プロジェクトというものがあります。高速道路のトンネルを掘った後にどうしても土砂が出ます。その土砂の捨て場を自然学校の敷地内に設けてあり、一面のガレ場ができています。約7ヘクタールありますが、そこを白川村のももとの森であるブナの森に戻していこうという計画を立てました。

また、世界遺産の合掌集落は毎年一軒から二軒が屋根をふきかえますが、合掌集落の屋根のふきかえた時に、古い屋根は地元の方に言わせると山の肥やしにしたということをやっていますが、今まで山に捨てていました。緑化するにあたって、これを植林に生かそうと、木を植えた後の根の周りに丁寧に巻いています。土の乾燥を防ごうと植林活動を進め、白川村の山野草を中心に植樹しております。つい先日、6月11日、12日の2日間にわたって木を植えました。その時は400本~500本、それから山野草も500鉢ほど植えました。何もない、全く何もない所ですので、トンネル残土は700から800メートル下の土なので、栄養分は全くない、ただの石です。そのまま置いても何も芽が出ないので、これでも栄養分のある土にします。何を持って完成と言うのか難しいですが、少なくとも20年はかかるのではないかと、20年ぐらいうればようやくその林、あるいは森にはなるかなと感じています。

4. バタフライガーデンプロジェクト

それから二つ目は、バタフライガーデンプロジェクトということに取り組んでいます。自然学校周辺は、30年間人が住んでいなかった結果、いい意味では手付かずの状態でした。そのため絶滅危機種のギフチョウが非常に沢山生息しています。このギフチョウを増やそうと、自然学校の敷地内に生息環境を整備していこうというものです。具体的にはカタクリの花を増やし、それからこのギフチョウは

飛騨地方ではウツバサイシンという植物に卵を産むのですが、その卵を産む植物を増やそうとしています。この二つを敷地全体で展開していこうという事業です。当然チョウにとってはトヨタ自動車の敷地であろうが、その周りの敷地であろうが、関係ないところ飛んでいます。地元の方々からも何度か他の所でもやって欲しいという話をすでにいただいています、一緒にやりましょうという話を今進めている最中です。

5. 不耕起冬季湛水稲作

三つ目が不耕起冬季湛水稲作です。白川村は世界遺産に登録されていますが、水田が不可欠です。ところが、人口2,000人の村に年間150万人の観光客が来ます。観光客が来ると当然観光業がさかんになり、その結果稲作どころではなくなるわけです。今はその景観を維持するためだけに一生懸命稲作をしている状況です。村の方々は口をそろえて負担になっていると言っています。何とか手間がかからない稲作を提案できないかということで、千葉県岩澤さんという方が一生懸命進めている不耕起栽培にまず自然学校で取り組み、実験した結果を世界遺産集落に反映していこうということになりました。耕さず冬も水を貯える田んぼは生き物が非常に増えていきます。それが原因かどうかは分かりませんが、夜になると虫が来すぎて困っているくらいで、夜は窓を全く開けられない状態です。ただ、生き物がたくさんいることはいいことだと思っていますので、この調子で田んぼもやっていきたいと思います。

6. 古道再開プロジェクト

四つ目は古道再開プロジェクトということを実施しています。もちろんどの地域にも古い道があります。白川村も昔歩いて渡ってい

た旧道がたくさんありますが、それを何とか再開しようとしています。蓮如上人が歩いたと言われている蓮如峠に通じる道をこのまま朽ち果てさせるのではなくて、もう一度復活させて歩いて行こうじゃないかということに挑戦しています。

その他に地域の子どもたちへということ、白川村教育委員会にプログラムを提供しています。例えばこれは去年やった事業ですが、自然素材で作ったロボットで、暗くなると、首を振るふくろうを親子で作りました。また、放課後の自然遊びプログラムの提供、白川村の小学校高学年、中学校一年生のリーダー養成キャンプのコーディネートなども実施しています。

7. 地域との共生

現時点で地域への貢献は何かということですが、職員が20名いますので、白川村は人口2,000人ですから1%増えました。それから当然それに関連して買い物や税金などについて明らかに貢献していることでしょう。その一方で、先程も紹介したプロジェクトで、本格的にはまだまだこれからですが、環境汚染というものはなかなか先が見える、すぐに結果が出るものではありませんので、結果が出るのはこれからだと思っています。若い人材の交流ということも村中で非常に期待をされています。過疎地域ですので、若い女性が行くとうちの嫁にどうかという話ばかりがいつも出てきます。それが交流になるのか分かりませんが、このような期待もされています。それから自然学校利用客増加による波及効果も当然あると思っています。

つまり、まさに今始まったばかりということ、とにかく続けることが一番の地域貢献になると考えています。村の方々も、それこそ世界遺産集落というのは300年、400年、何百年と生活し続けたの方々ですので様子を伺

っています。1年、2年、3年、4年ぐらいでは、「やっているな」とは評価していただけないと思っています。とにかく焦らず諦めずという姿勢でやっていこうと思っています。

【質疑応答】

コーディネーター：各シンポジストに2点お聞きします。1つめは、報告いただいた地域貢献活動の達成度、自己採点はどれくらいなのか、また、地域の方からどれくらいの評価をいただいているのかということ。2つめは、今まで進めてこられた活動をさらに発展していくために行っている評価のポイントは何か、あるいは今後さらに必要だと考えている評価のポイントは何か。

上山：よく言われるのは企業という利益を追求する社会的組織が、いわゆる社会貢献活動というのは一見馴染まないのではないかという話があります。これは社内でもそういう論議があるのですが、基本的に世の中がどんどん変わっていて、企業というものを評価する評価軸がどんどん変わってきています。トリプルボトムラインという言葉がありますが、経済的な評価、それから社会性ということに関する評価があります。もう一つは環境という問題。二十一世紀の大きなテーマで、環境に対してどういうアクションをとるか。この三つの評価軸で企業が評価をされるということ。しかもそれがマーケットという市場の中で評価がされるという世の中が変わって、例えばSRIファンドというものが世界的に非常に成長してきて、そういうトリプルボトムラインから見て評価が高い企業により低利な投資をしていくというファンドが大きく成長していることが事実あります。日本はまだ遅れていますが、どんな企業が社会から求められているかということとはもう明確なわけです。

そういう企業しか残れないような社会に今変わってきています。

具体的には中期的、長期的に見て、お客様が店舗を選ぶ時にジャスコが選ばれるということを我々は目指しているわけです。だからそういう全く従来とは異なるような具体的な評価を企業は受けるべきだと思います。私共も先進企業さんのような企業に変わりたいという宣言をして、ベクトルを全部そこに合わせているわけです。それが評価ということに関する私の答えであるし、それを今やり続けているということです。それから自己採点ですが、私はまだまだ合格点は与えられるものではないと思っています。

コーディネーター：合格点をいただくというのは永久に難しいことでしょうか？

上山：そんなことはないと思っています。4年半前に今の仕事に就いて、4年半前の状態と今のイオンの状態というのは明らかに成長していると私は言えますけれども合格ラインではない。ただ地域によっては合格とっていい地域は正直あります。

例えば滋賀県、あるいは京都市などある特定の地域で、コラボレーションが非常に成長して、結果的に自分のバッグで買い物をするという率が格段に高い地域があるわけです。もう3割を超えるお客様が、レジ袋はいりませんと言います。大きなばらつきがある中で地域力というものが大変成長しています。その根底が、自治体とか市民の人達、あるいは企業の努力が掛け算に完全になっていると思える地域があるので、そこは合格点だと思いますが全体ではまだまだです。

佐川：まず達成度ですけれども、私個人から言うと、オーバーワークです。里山自然学校は毎年非常に拡大をしていると思っています。例えば、去年考えていたことが今の時点

で達成できたが、次のことがどんどん生まれてくるので、いつまでたっても満点になりません。

その理由は、大学として自然学校をどういう風に取り組んでいったらいいのかということやうまく見定められないまま、いろいろな事業をやっている、やりたがっているというようにも思っています。達成度という点ではかなり満足感はありますが、どこまでやっても満足しきれない状態です。

また、我々の活動に対する評価をもっと上げてほしいとも思っています。それから住民の満足度ということもこれは一概に申し上げにくいと思っています。地域レベルでの活動ですので、大学の高度なことを提供することは必要ないだろうと思っています。大学というところが敷居は高くないということを理解していただくに、里山自然学校は結構よい活動が実施できていると思っています。また、大学やっている研究をメイトの方が関わっているのも、質の高さという点でも一定の人達には満足感を与えているだろうと思っています。

ただ、里山自然学校をどれだけ地域の人が知ってくれているのか、というところで点数をつけると、まだまだ非常に知名度は低いと思っています。石川県の放送局が、夕方の番組で「角間の里」を生中継したりしているので認知度も高まっていますが、それを見た次の日には人がどっと押し寄せるくらいです。

私がポリシーとして考えているのは、里山を通じて何かやりたいというアイデアをどなたかが持ってきたら、断らずに「とにかくやってみよう」と言うことです。「とにかくやってみて、考えましょう」と。だからまた困っていくのですが。最初の話で言うと分母がさらに大きくなって満点に近づいていけないのは、自分達が大きくなっている証拠だと思います。

「角間の里山メイト」は、金沢大学の秘蔵

っ子ではなくて、ある一つの団体にすぎないと思っています。いろんな団体がもっとたくさんできて、里山の大学のプロジェクトが進んでいったらと思っています。

コーディネーター：次はNPO白川郷自然共生フォーラムの山田さんですが、事業が四月に立ち上がったばかりで、事業がまだ終わっていないかもしれませんが、立ち上げの経緯あるいは三ヶ月ほどたったところでの感じられる評価に対する考えについてお願いします。

山田：NPO法人としての活動はまだまだこれからです。自然学校としてはすでに事業が進んでいます。ソフト部分に関してはまさにこれからという感じです。いろいろな方が「わしは山の名人だ」とおっしゃってですね、どなたにお話をお伺いしているのか分からない状態です。そういう方々はある人に質問に行くと、「何でお前はあいつに聞きに行ったんや、わしになぜ聞きにこんのや」と言われます。地域の方との人間関係づくりが難しく、地域の方からの評価については、私たちもまだ評価しきれない段階です。

コーディネーター：私のほうからどのように事業を評価し、その活動につなげているのかという質問をさせていただきました。フロアーの方からもできれば評価、あるいはその使命、ねらいのことにに関してどう考えているのかという質問をお願いします。

フロアー：国際基督教大学の松岡です。評価の前にトヨタ白川郷自然学校の「学」を「學」という難しい字を使っていますがどういう意図でしょうか。また、基調講演の涌井先生の話にあった、産業社会を作るための人を教育していくためには、その社会に合った、産業構造に合った人を育てていくということで、知識を一方向的に与えるだけの上から下への教

育が効率的になされるということがあります。それとは違って、世の中が多様化してきているいろんな人が出てくると、まさに何が起るか分からない自然の中でどう自分が対処していくのか、その場その場で自分が付き合わなければいけない、そういう力を創る、そういう力を提供していくのが野外教育の中にあり、他の教育と違うところ、特徴であると私は思っています。そういうところの観点の評価の視点をどのように持たれているのか、それをどのように考えているのか、またどういう風にしていくのかというところで、その視点からも貢献度についてお考えをお聞かせください。

コーディネーター：野外教育における人づくりという視点での評価の観点、軸といった点についておねがいします。

山田：一つめの自然学校の学という字が難しい字になっているのは、小学校、中学校とは少し違うということと、もともとあの「學」という字には悟るという意味があると漢和辞典に書いてありまして、その悟るところを大事にしようということです。伝えるのではなく、その自然の中で気付いてほしい、悟ってほしいと、いうことを私達も日々大事にしています。そういう意味で日々のプログラムのふりかえりや評価の時に、参加した方々からの、「インタープリターと一緒に歩くとこんな面白いことに気付いた」という声を集めるようにしています。今はそれを評価と考えています。

佐川：自然とどう対処していくのかという視点は、現在のところ持っておりません。それは、そういう視点を持ったスタッフが現在のところいないからだとしか答えようがありません。しかし、最初話をさせてもらった学校とのかかわりで言うと、教科書的でない、順

序に非常に自由度があり、それはどんな学習の仕方でも、順序はいくらでもあるということ、それから双方向的であって、子どもを見て大人が学ぶということが非常にバラエティーであるということが特徴だと思っています。それから、里山は自然ですけれども、非常に文化的な内容を持った技術とも関わっています。そこには非常に縦の幅が広い参加者が加わっていますので、同世代の交流だけじゃない、おじいちゃんおばあちゃんという先人の知恵やアイデアを引き継いでいくというか、そういう可能性はあると思っています。とにかく自然という場所の魅力に引き付けられながら、交流できることが学校的かなと今のところは考えています。

上山：非常に感じる事が今までの経験であります。私は体験をすることについての価値というものを痛絶に感じるシーンに何回か遭遇したことがあります。ポイントは二つありまして、先程の子どもエコクラブの活動であるとか、エコロジーミュージカルの時の子ども達が態度変容していくプロセスを横から見ている時に、どういうものが彼らに刺激を与えて彼らの態度変容を生み出しているのか、というのを感じる時に、やはりその体験をする前に共感という行為が、彼らにあるということに非常に相関があると思います。

もうひとつは、以前に能力開発部を担当したことがあるのですが、ジャスコ大学とかイオン大学院という、企業大学の教育プログラムを作って、それを企画し運営していたのですが、私どもの従業員は店舗の85%がその地域にずっと住んでいる主婦の方だと申し上げましたけれども、彼女達が持っている暗黙知を含めた知恵をいかに言語知に変換するかというマネジメント能力がすごく重要なわけです。もちろん暗黙知というのは文字にして書くことも言葉にも発声することはできない。しかし、何かおかしいという事を感じる暗黙

知を言語知に変換するというマネジメント能力が、店のマネジメントにとってもものすごく重要な能力であるということになり、プログラムの中に入れて現在も評価しています。その時に非常にマネジメント能力の高いと評価を受ける人達のいわゆる体験の頻度の高さということがやっぱりあるということです。

こういうことを臨床的に我々は感じてきました。おそらく野外教育というのは、体験をするということの密度が日常とは非常に違うのだらうということをつ井先生の講演を聞いて私は感じました。

コーディネーター：野外教育の指導者が活動中にいろいろなことを感じることを、地域の方にフィードバックしていくことで地域の貢献にもつながっていくのかなというようなことも感じました。

フロアー：明治大学の星野です。佐川先生にお伺いします。里山自然学校の大学内でのシステム上の位置付けと学内の評価はどうなっているのかということをお伺いします。それと、そもそも佐川先生がどのような理由で関わるようになり、どういう経緯でこの里山自然学校が立ち上がったのかとかその辺のところを少し伺いたいと思います。

佐川：里山自然学校が学内の中で認知された最初は、当時まだ文部省だったと思いますが、その中の生涯学習関係の予算を申請して認められた平成11年です。その時に、予算が続く限り自然学校はとりあえず認めていきたいと思いますという形でスタートしました。綱渡り的に平成11年から予算がいろいろ変わりながらつなっています。金沢大学が特別なのか他の大学が特別なのか分かりませんが、うまくいっている間は大学での位置づけを示す明確なポリシーを示してくれません。例えば事務的なことをフォローしてほしいとか、正規のス

スタッフをつけてほしいとかそういう要望をだしますが、どんどんやってくださいって言うだけです。

国が予算をつけているということは、里山というキーワードが国の政策の中では非常に評価できるものなのかと理解しています。それから地域の人達も、自然学校の活動にますます参加してくれていますので、評価してくれているのだらうと思っています。そういうことから考えると、もう少し大学自身が評価してほしいと思っているのが正直なところです。

私はスポーツ社会学が専門です。最近では里山が専門じゃないかって言う人もいますし、早く専門変えたほうがいいのではと言われていました。私に関わった経緯は、愛媛出身なのですが、山の中で育ち非常に里山を身近に感じていたからでしょう。草刈りみたいなのをするのが大好きでしたからボランティアで始めたのですが、抜けられなくなってきました。

フロアー：国立乗鞍青年の家の村井です。企画遂行段階で結構ですので、問題点をどうクリアされたのか何かアドバイスになるような言葉をいただければと思います。

山田：問題点、課題は常に山積みです。話しますと一晩でも二晩でもしゃべれるくらいありますが、大きく言うと、やはりいろいろな方の意見を調整するということでしょうか。それに尽きると思います。

佐川：今一番困っていることは、自分達が取り組む事業が多すぎて、これをまとめて報告する時間が持てないということです。ホームページにもあるのですが、情報を新しくすることができないということに困っています。スタッフを入れた方がいいとか、あるいはもうHTMLをやめて、ブログ形式にしなければ

だめじゃないとか、いろいろ考えています。それが今一番重要と思っています。

それから学生の参加が少ないことです。学生にしてみれば、なんでこんな不便なところという発想です。どのように宝の山に変えられるかというようには、ほとんど見てくれません。虫もいっぱいだし嫌だなあとと思っているのではないのでしょうか。それから里山メイトとの取り組みで言うと、いろんな人がいます。それを無理矢理調整するのはナンセンスだと思っています。地域のレベルでやることですから、いつまでも解決しない問題を、楽しみながらやるとみんなに言い聞かせながら、自分にも言い聞かせながら、不便で上手く行きにくいところを、楽しんだらいいじゃないかという風に思っています。

上山：企業活動の中でこういうコーポレートシチズンシップとか審査みたいなことをやる時に一番大きな壁になるのは、それぞれの組織の縦と横との関係であると思います。例えばショッピングセンターを開発するのは開発本部という一つの大きな専門部隊があります。当然彼らは、その部門の最適を常に追求する組織であります。商品を開発する場合でも彼らはその専門職としてのプライドも、知識も、経験も権限も、予算も持っている。そこに、私どもの部署が、会社全体の最適を追求するというで彼らの優先順位を変えさせていかなければならないということがあります。

具体的に言うと千種ショッピングセンターをエコストアにするということは、これは開発本部のアイデアではなく、我々の方から提案して、そしてこれを具現化させました。そうするとイニシャルコストは大体少しは高くなります。通常その部門の最適を考えると絶対そういうコストアップはOKしないわけです。しかし、企業の将来の可否を考えた時に絶対その優先順位を変えなければいけないと

いうことを説得し、彼らを納得させて予算を圧縮させるといふことへ持っていきます。だからそういう部分、部門の最適と会社全体の最適をいかに調和させるかということが最大のテーマであり、現在の悩みを発していると言ふのが正直なところではあります。

それからNPOの人達とか行政の人達とか例えば今ですと、その経済産業省と環境省との間でレジ袋の発生抑制の問題を今議論しているわけではあります。彼らは全く組織外の人達で、組織外の人達といかに連携して、一つの社会的な最適を追求することに関しての場合、会社の中ではヘッドシップという部長というパワーが結構作用するのですが、こういう場合は全然ヘッドシップは作用しません。まさに本当のリーダーシップが必要になってきます。こういうような意味での悩み、苦しみというのがあります。これはもう組織の中も、組織の外とも全く同じだということでもあります。

コーディネーター：シンポジストの方それぞれにまとめとして、これから目指す方向性をひとつお願いいたします。

上山：会社で働いている従業員が、こういうイオンで働いていることに誇りを感じとれるような会社に変えたいということが私の最大の目的、テーマです。

佐川：里山自然学校では現在、生態学の先生達はかなり熱心に関わってくれていますが、教育学の分野で、参加してくれる方が少ないので、これをぜひ増やしていこうと思っています。

山田：白川郷自然共生フォーラムとしてはまず何よりも自然学校の運営を軌道に乗せるということだと思います。

コーディネーター：地域貢献はこの他にも文部科学省が進める「子どもの居場所づくり」という形で、いろんな団体、NPOの協力も仰ぎ進んでいっておりますし、それから我々野外教育の関係者、個人という視点でも大切だと思います。難しい問題ですが、会員それぞれが所属している団体でいかに地域に貢献していくかということを考えていかなければならない問題と考えられます。